

## 2 三十年戦争と西欧国際体制の成立

### 1) 三十年戦争

#### 三十年戦争前のドイツ

「ウェストファリア条約後の神聖ローマ帝国」菊池良生『図説神聖ローマ帝国』河出書房新社、2009年 71  
ページ

神聖ローマ帝国

300余りの領邦と帝国都市の連合体

皇帝 聖俗7人選帝侯によって選出されるが、事実上ハプスブルク家が世襲

選帝侯には大幅な特権が付与されており、帝国内での国家化の傾向

宗教改革の衝撃 多様な階層、人々に影響

1522-23 騎士戦争

1524-25 農民戦争

→ドイツの宗教改革、領邦諸侯によって主導される

ルター派の諸侯 領邦教会確立

1546-47 シュマルカルデン戦争

皇帝側の勝利；強硬な諸政策→カトリック諸侯の反発

1555 「アウクスブルク宗教平和令」

領邦諸侯、宗教の裁判権を獲得→領邦の国家化

#### 三十年戦争の展開

① ベーメン・ポーランド戦争（1618-1623年）

1618 プラハの窓外放出事件

「ハプスブルク家略系図」

長谷川輝夫・大久保桂子・土肥恒之『世界の歴史 17 ヨーロッパ近世の開花』中央公論社、1997年 p.136

→ ベーメンの反乱

フェルディナンド2世の廃位を宣言

ポーランド選帝侯フリードリヒ5世をベーメン王に選出

皇帝軍の勝利と過酷な報復措置

皇帝の権力拡大、スペイン・ハプスブルクとの提携は諸侯に衝撃を与えると同時に周辺諸国の介入を招く

② デンマーク戦争（1625-29年）

フランス

デンマーク イギリス、オランダの援助のもと、プロテスタントの擁護を掲げて北ドイツに侵入

→皇帝軍の勝利

1629 「復旧勅令」

↑  
↓

1630 選帝侯会議

③ スウェーデン戦争（1630-35年）

参戦理由

グスタフ・アドルフ ルター派  
バルト海域への脅威

フランスの援助

スウェーデンの軍事的優位 スウェーデン方式

プロテスタント諸侯合流

↓

グスタフ・アドルフの戦死

スペインと連携した皇帝軍の優位

→ 諸侯 個別の同盟締結権を剥奪される

フランスの介入

④ フランス・スウェーデン戦争（1635-48年）

## 三十年戦争の対立軸

宗教的対立

皇帝と諸侯の権限をめぐる対立

フランス/スウェーデンとハプスブルク帝国の国益をめぐる対立

## ウェストファリア条約

① 「アウクスブルク宗教平和令」の再確認

カルヴァン派

② スウェーデン 北ドイツのポンメルンその他の領土を獲得

フランス アルザスとロレーヌの一部を獲得

③ 領邦 主権と外交権を獲得

cf. 皇帝

→領邦の国家化

領邦が主権と外交権を獲得する条件：皇帝と帝国に敵対しない。

領邦君主 選帝侯、公、伯という身分差が意味を持ち続ける。

帝国 その後も 150 年にわたって存続

諸領邦が平和的に共存するための大枠として機能

フランスやオスマン帝国の侵攻に対して集団的な防衛力を発揮